



# おすすめの一冊

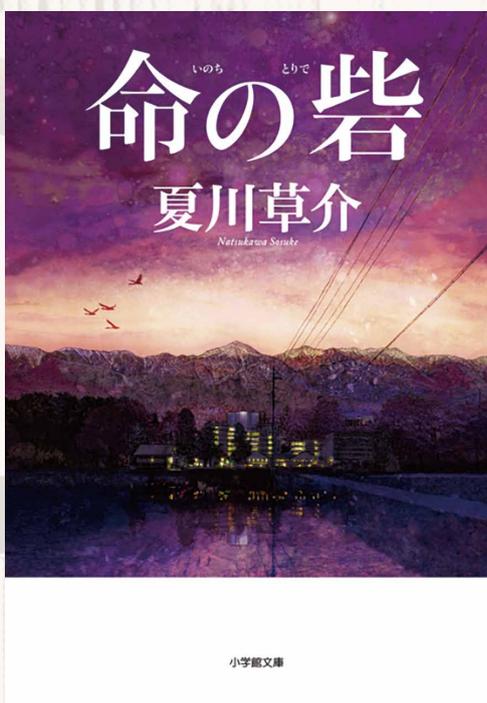
## 夏川草介『命の砦』

**新** 新型コロナウイルス感染症が感染症法の5類に移行してから約1年6カ月が過ぎた2024年の11月に、私が本屋で手にした本が『命の砦』でした。

著者の夏川草介氏は、ご存じの方も多いと思いますが、信州大学医学部を卒業後、消化器、肝臓の専門医として長野県で地域医療に従事するかたわら、『神様のカルテ』で2009年第10回小学館文庫小説賞を受賞して、小説家としても活動されています。この『神様のカルテ』は映画化され、また、テレビでもドラマ化されました。

さて、『命の砦』は、新型コロナウイルス感染症が初めて日本で確認され、クルーズ船が横浜に入港した2020年2月からの長野県内の公立病院を舞台に、県内でも数少ない新型コロナウイルス感染症患者を受け入れて奮闘する医師たちの物語です。

2020年2月から始まったコロナ



命の砦  
夏川草介 著  
小学館文庫

禍は、私たちの生活に大きな影響を及ぼしました。しかし、それから5年が経過した今、過去のことには私たちの記憶から失われてきていると思われまふ。思い起こすと、私は5年前、健診機関で働いておりましたが、巡回健診のほとんどが中止となり、事業の先行きにかなり不安を覚えておりました。その後、緊急事態宣言が解除となり、健診

事業を再開しましたが、健診で使われるエックス線検診車は、いわゆる「3密」の状態になりやすいといわれ、かなり苦勞したことを思い起こします。著者の夏川草介氏は、本書の「あとがき」の中で、「それからわずかな歳月を畳んだだけだが、時代の変化は目まぐるしい。二年前の想定や思惑など一切を振り捨てて、時代だけが全力疾

走を続けているかのようだ」と書いています。さらに、「二〇二四年現在、新型コロナウイルス感染症はごくありふれた疾患であり、一般の診療所で診察し、投薬して治療する。そのありふれた疾患に対して、冷や汗を掻き、恐怖に手を震わせながら診療している本書の登場人物たちの姿は、ほとんど滑稽と言ってもよい。……わずか四年前の世界が、当事者である私にとってさえ、もはや共感の難しい歴史的事実に変じている」とさえ述べています。新型コロナウイルス感染症のことは、すでに私たちの記憶から薄れようとしております。

本書を読んで、新型コロナウイルス感染症で起こったさまざまなことを教訓にして、今後の未知の感染症に備えるためにも、私たちの記憶にとどめておかなければならないと痛感しております。

## 中野 厚夫

なかの あつお

2023年7月より公益財団法人予防医学事業中央会専務理事。前職では、健康増進・健診機関（公益財団法人ちば県民保健予防財団）において、法人の管理・運営等に従事。2022年6月に退任後、同年12月に予防医学事業中央会に入職、現在に至る。東京都予防医学協会評議員。